

令和 6 年 6 月 28 日現在

機関番号：33908

研究種目：基盤研究(A)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19H00614

研究課題名（和文）福島における分断修復学の創成：多様な選択を可能にする社会を求めて

研究課題名（英文）Creating a Study of Repairing Fragmentation in Fukushima

研究代表者

成元哲（Sung, Woncheol）

中京大学・現代社会学部・教授

研究者番号：20319221

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 34,900,000円

研究成果の概要（和文）：20世紀の科学技術の「粋」を集めた原子力発電所で起きた未曾有の出来事は人間の「からだ」「こころ」「きずな」に長期的にどのような帰結をもたらすのか。なぜ人為災害なのに被害者同士で分断が生じるのか。どうすれば家族、地域、社会における分断を乗り越え、傷を癒していけるか。福島の実態把握に基づき、多様な関係者が宥和せずとも、共存できる相互理解を可能にする知的枠組みと関係者間の取り組みを、集合的トラウマとしての原発分断、修復に向けた介入研究として取り組んだ。

研究成果の学術的意義や社会的意義

原発事故後、福島県中通りの9市町村、浜通り、広域避難区域において原発事故をめぐる分断の実態把握と、原発分断を集合的トラウマとしての捉え、修復していくための取り組みをすすめてきたという点において学術的ならびに社会的な意義がある。とりわけ、原発事故ならびに放射性物質に関するリスク認知と認識のずれ、避難・保養・食材選びといったリスク対処行動をめぐる家族・地域社会におけるずれや行き違い、補償をめぐる不公平感、広域避難区域におけるいじめ・差別、これらによる分断について集中的に研究資料を集積し、『原発分断と修復的アプローチ』（東信堂、2023年）を刊行した。

研究成果の概要（英文）：What are the long-term consequences of the unprecedented event that occurred at the nuclear power plant, the culmination of 20th century science and technology, on the human "body," "mind," and "bond"? Why is there division among victims of a man-made disaster? How can we overcome the divisions within families, communities, and society, and heal the wounds? Based on our understanding of the current situation in Fukushima, we have been working on an intellectual framework and inter-personal efforts to enable diverse stakeholders to coexist without appeasement, as an intervention study for repairing the nuclear plant's fragmentation as a collective trauma.

研究分野：社会学

キーワード：集合的トラウマ 原発分断 記録 修復的アプローチ 対話の場 介入研究

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

20世紀の科学技術の粋を集めた原子力発電所で起きた未曾有の出来事は人間の「からだ」「こころ」「きずな」に長期的にどのような帰結をもたらすのか。また、なぜ人為災害なのに被害者同士で深刻な分断が生じているのか。さらに、どうすれば家族、地域、全体社会における分断を乗り越え、傷を癒していけるか。原発事故による放射能汚染は被害が不可視であり、科学的な不確実性と社会的差別を伴っている点から、関係者間で「過小評価」と「過大評価」の狭間で揺れ動いてきた。原発事故から7年半が過ぎた福島で広がっているのは、避難者とその他の県民、避難者同士、県内と県外など幾重にも折りたたまれるような重層的な分断である。そして何よりも深刻なのは、福島県内の家族と地域社会における分断である。自問自答や口をつぐむ以外、もはや相互に対話が不可能な様子を呈している。

いま学術に求められているのは、分断を前に沈黙するのではなく、多様な関係者が参加し、共有できる知的枠組みの構築である。本研究は、福島の現状に対する実態把握に基づき、多様な関係者が宥和せずとも、共存できる相互理解を可能にする知的枠組みと関係者間の取り組みを分断修復学として創成しようとするものである。

2. 研究の目的

本研究は、福島原発事故後の家族、地域、全体社会における分断構造を明らかにし、それを修復するアプローチを分断修復学として創成しようとするものである。大きく次の三つの取り組みをすすめる。第1に、これまで7年間実施してきた社会調査を継続し、原発事故の実態解明を行う。第2に、原発事故後の困難な時期をどのように乗り越えてきたのかを「親子をつなぐサポートブック」を作成し、親が子に語り聞かせる作業を行う。このサポートブックを地域内で少人数の親子が持ち寄って「語り部活動」を行う。第3に、避難区域における分断とコミュニティ再建に関する調査を継続し、その知見を制度形成に向けた政策提言に生かすと共に、分断修復学のもとに集約する。これにより、原発事故という全く新しいタイプの災害における生活変化と健康影響に関する科学的知見を蓄積し、さらに自らが当事者として多様な選択を可能にする社会の仕組みを探求し、分断修復学として高めることによって、紛争や移民問題など他の問題にも応用可能な知的インフラを構築することを目的とする。

3. 研究の方法

具体的には、長期追跡の社会疫学調査によって原発事故の実態解明を行い、その結果をもとに、分断修復のための学際的な介入を行う。これにより、福島における分断修復学の創成である。

4. 研究成果

疫学調査の回収状況は、下記の通りである。

第1回調査 (2013年)			第2回調査 (2014年)			第3回調査 (2015年)			第4回調査 (2016年)			第5回調査 (2017年)			第6回調査 (2018年)			第7回調査 (2019年)			第8回調査 (2020年)			第9回調査 (2021年)		
A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C
6191	2628	42.4	2628	1606	61.1	1605	1209	75.3	1297	1021	78.7	1026	912	88.9	1019	832	81.6	936	814	87	893	725	81.2	923	678	73.5
1203			718			746			612			549			451			440			377			365		

表1 回答状況

A：調査対象者数 B：回答数 C：回答率（％）

下段：自由記述記入者数 2021年3月23日の時点での数(2021年6月10日現在：B:680)

そして、原発事故後の日常生活の変化について、2013年1月の第1回調査では12項目を「事故直後」、「事故半年後」、「この1ヶ月間」の三つの時期に分けて質問した。第2回調査以降は、上記12項目に加えて、「放射能に関してどの情報が正しいのかわからない」、「原発事故後、福島に住んでいることでいじめや差別を受けることに対して不安を感じる」の2項目を追加して14項目を質問した。ここでは、2013年1月から2021年1月までの9時点の原発事故による生活変化の傾向を示す。

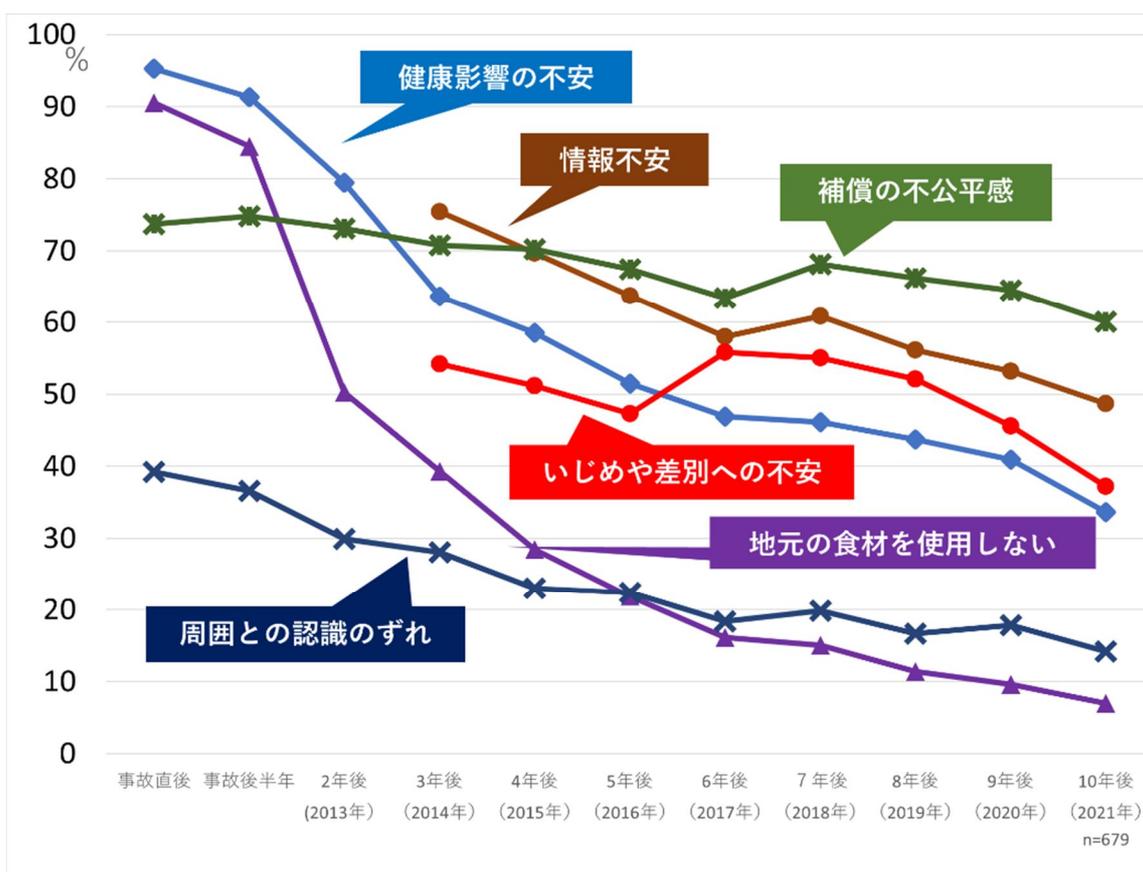


図1 原発事故後の生活変化

原発事故後の生活変化にはいくつかの傾向が確認できるが、ここで注目したいのは、事故から8年以上経過した時点で、5割以上が「あてはまる」、「どちらかといえばあてはまる」を含む。）と回答し、高止まり傾向が続いている3つの項目、「補償をめぐる不公平感」、「放射能の情報に関する不安」、「いじめや差別への不安」である。

原発事故という「非日常」からゆっくりと「日常」へ戻りつつあっても、生活や意識のなかでは今なお影響が続いていることがこれらの調査結果からわかる。とりわけ、補償の不公平感、放射能に関する情報不安、いじめや差別への不安、健康影響不安、経済的負担感、保養意欲などが

高い比率のまま推移しており、放射能への対処をめぐる認識のずれが持続していることが表れている。すなわち、原発事故から10年以上が経過したものの、子どもをもつ母親の生活にはいまだ大きな影響が及んでいるということを示している。

また分断という観点でみると、福島における分断は次の三つの項目で観察できる。第1に、補償をめぐる不公平感である。これは主に福島県内の浜通りとその他の地域との間の分断として現れている。第2に、「原発事故後、福島に住んでいることでいじめや差別を受けることに対して不安を感じる」(以下、「いじめ・差別への不安」)は、近所や友人・知人の間でも生じるが、多いのは、県外と福島出身者・在住者との間に生じている。第3に、放射線監視装置(モニタリングポスト)の撤去をめぐる賛否は、同じ地域で子育て中の母親同士の分断である。

補償不公平感は上で確認したとおり、原発事故後の生活変化の中で最も高い割合で推移し、分断を象徴する項目である。では、補償をめぐる不公平感は、主に誰が抱いているのか。それは、学歴や収入が低い層、ゆとりがない層であり、居住年数が「1年未満」と「20年以上」の層、サポートネットワーク数が少ない層である。

次に、「いじめ・差別への不安」についてみると、最も多いのは、将来、福島出身であることで差別を受けるのではないかという不安である。また、これとも重なる内容も含んでいるが、結婚する時の差別不安と、他県の人から既に差別を受けた、または現在差別を受けているというものもある。では、どういう人が、いじめ・差別への不安を抱くのか。それは、学歴が高い層、そして、居住年数が20年以上の長い層である。

2021年1月の第9回調査では、原発事故の風化を「感じる」という回答が初めて6割を超え、「どちらかといえば感じる」を加えると、9割近い結果になった。「風化を感じる」という回答には10年を節目として、「前を向こう」という内面からの声と、忘れられることに対する不安の両方の側面がある。風化には、いつまでも事故に引きずられず日常の生活に戻りたいという思いと、将来あるかもしれない事故の影響について忘れることができないという複雑な思いが交差している。

本調査はすでに述べたように、福島県中通り9市町村の2008年度出生児とその母親(保護者)という限られた人を対象としている。したがって、本調査結果が福島のすべてにあてはまるとは言えない。ただ、福島は人為災害によって有害物質による大規模な環境汚染が疑われる地域であり、広範な地域が被害の対象となっている。こうした環境汚染が個人の心身の健康への影響だけでなく、家族、地域、友人・知人といったコミュニティの有機的な組織にも影響を与え、基本的信頼を低下させ、それが長期にわたって地域の集合的アイデンティティの損傷や集合的効力感の低下を招来する可能性がある。加えて、補償問題などをめぐる紛争が長期化することが予想されるという点が特徴として重なっている。

福島県中通り9市町村に加えて、原発避難者を受け入れた最大の基礎自治体であるいわき市では、避難者と受け入れ住民をとりまく複雑な関係が垣間見えた。避難者と受け入れ住民との関係は対等ではなく、原発避難者が自らの声を上げにくい状況ができています。賠償の仕組みが被災者の個人化を加速させ、他者と連携して被災地復興に向けた共同性の構築を難しくしている。長期の避難指示のなかで、それぞれの被災者世帯は自らの置かれた状況を考慮して最適な生活再建策を選択しているのであり、その選択を第一に尊重しなければならない。

また、2017年春に避難指示が解除されたそれまでの居住制限区域では、帰還と復興をめぐる分断がみられる。性急な復興促進は自然の豊かさや親密な人間関係に支えられてきた地域に短期的な経済論理を持ち込みがちだ。選択肢を残しつつ時間をかけて検討することで、よりよい合意点を見つけたいという現実的な判断もあるが、当面の課題への対応と将来的な見通しの確保

との関係が問われている。地域における固有の価値を取り戻し、地域の尊厳を再構築するためには、事故によってなくなったものの貴重さと現在に続く被害とを確認する必要がある。

さらに、新潟県への長期にわたる原発避難の経過をたどり、広域避難者における「関係性」の変容を跡づけた。原子力災害の被災者にとって、時間の経過が被災者個人や家族の復興・再生、あるいは暮らしの復興にも心の復興にも結びついていないという現実を聞き取り調査から明らかにする。避難者の「語り」からは、不安や「宙づり」の感覚、気持ちのゆれが共通して読み取れた。当事者の自己回復を図るためには、基本的には、多様な「共有」のためのさまざまな通路をつくり出し、つながりあう地道な試みを続けていくしかないのではないかと。

少し違う角度からのアプローチではあるが、地域の行事を通じた分断修復を検討した。伝統行事には「機会の創出」という社会的相互作用自体のきっかけづくりの側面と、分断修復の核心部分である「相互理解の促進」、すなわち、分断修復に寄与しうるコミュニケーションを生む側面が考えられる。被害意識が薄れつつありながら、不安も抱き続けるという両義的な状況にあるなかで、福島市大波地区の人々が、自らの力で粛々と行事を推進し、交歓のなかに結びつけられることで、徐々に分断を修復していく可能性を期待する。

最後に、福島県中通りの調査対象者に対する分断修復に向けた介入研究の試みを紹介する。福島子ども健康プロジェクトは調査対象者と研究者の間の信頼関係の構築の試みであり、またその信頼関係を基盤に研究者が現地に介入して分断を修復する試みである。調査票に書き込まれた膨大な数の声をまとめて送付、定期的な原発事故後の家族の経験の聞き取り、さらに、2019年から調査参加者が自分の立ち位置を相対化する機会を作ることを試みた「ふり返り手帳」、2020年からは研究者がファシリテーターとなって、調査参加者同士の語り合いの場「語り合いの場ふくしま」というワークショップを進め、現在も続けている。こうした一連の活動を通じて、福島県中通りににおける分断修復の試みを、試行錯誤と手探りで実行し続けている。

こうした試みを通じて、福島における分断修復学が目指しているのは、コンセンサスという形での相互理解とは一線を画し、自分たちが違うものをみていることを学び取ることによって、それぞれの立ち位置と行動選択の幅を認め合う道を切り開くことにある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 成元哲、牛島佳代	4. 巻 16巻2号
2. 論文標題 福島における分断修復学の創成：トラウマを抱えたコミュニティを回復の共同体に	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 中京大学現代社会学部紀要	6. 最初と最後の頁 83頁 138頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 成元哲、牛島佳代	4. 巻 16巻1号
2. 論文標題 トラウマを抱えたコミュニティ：集会的トラウマの社会学	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 中京大学現代社会学部紀要	6. 最初と最後の頁 97-145
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 成元哲、牛島佳代	4. 巻 16巻2号
2. 論文標題 福島における分断修復学の創成：トラウマを抱えたコミュニティを回復の共同体に	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 中京大学現代社会学部紀要	6. 最初と最後の頁 83-138
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 成元哲、牛島佳代	4. 巻 16巻1号
2. 論文標題 トラウマを抱えたコミュニティ：集会的トラウマの社会学	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 中京大学現代社会学部紀要	6. 最初と最後の頁 97-145
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 成元哲、牛島佳代、松谷満	4. 巻 第 15 巻 第 1 号
2. 論文標題 原発事故10年、コロナ禍の福島の子どもの声 2021年調査の自由回答欄にみる 福島県中通り親子の生活と健康	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 中京大学現代社会学部紀要	6. 最初と最後の頁 93 ~ 122
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

福島子ども健康プロジェクト https://fukushima-child-health.jimdofree.com/

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	三上 直之 (MIKAMI NAOYUKI) (00422014)	北海道大学・高等教育推進機構・准教授 (10101)	
研究分担者	牛島 佳代 (USHIJIMA KAYO) (10336191)	愛知県立大学・看護学部・准教授 (23901)	
研究分担者	松谷 満 (MATSUTANI MITSURU) (30398028)	中京大学・現代社会学部・准教授 (33908)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	高木 竜輔 (TAKAGI RYUSUKE) (30512157)	尚絅学院大学・総合人間科学系・准教授 (31311)	
研究分担者	松井 克浩 (MATSUI KATSUHIRO) (50238929)	新潟大学・人文社会科学系・教授 (13101)	
研究分担者	阪口 祐介 (SAKAGUCHI YUSUKE) (50589190)	関西大学・総合情報学部・教授 (34416)	
研究分担者	除本 理史 (YOKEMOTO MASAFUMI) (60317906)	大阪公立大学・大学院経営学研究科・教授 (24405)	
研究分担者	長澤 壮平 (NAGASAWA SOHEI) (70535327)	中京大学・文化科学研究所・研究員 (33908)	
研究分担者	藤川 賢 (FUJIKAWA KEN) (80308072)	明治学院大学・社会学部・教授 (32683)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------